平成 16 年 7 月の解説（府県天気予報）

【7 月の天候状況】

7 月は太平洋高気圧の勢力が例年に比べて強く、梅雨前線は日本海まで北上することが多い状況でした。高気圧に覆われて晴れの日が多かったため、東日本と西日本を中心に気温が高くなり、月平均気温はほぼ全国的に平年値を上回りました。横浜など 6 地点で 7 月の月平均気温の最高値を更新しています。また、岡山などで月降水量の最小値を、延岡（宮崎）などで月間日照時間の最大値を、それぞれ更新していますが、一方で、梅雨末期の豪雨や台風による大きな災害がありました。

上旬は、日本の南東海上から張り出す高気圧の西端に位置する西日本を中心に大気の状態が不安定な日が多く、局地的に短時間の強い雨の降る日がありました。4 日から 5 日にかけては、日本海を北東進する低気圧に向かって吹く南風の影響で、西日本を中心に広い範囲で最高気温が 35℃を上回りました。

中旬は、朝鮮半島から延びる梅雨前線が北陸地方や東北南部で停滞し、前線の活動が活発化したため、新潟・福井・福島の 3 県を中心に豪雨が発生しました。その一方で、東日本の太平洋側から西日本にかけては高気圧に広く覆われ、雨が少なく、気温の高い傾向が続きました。特に、20 日から 21 日にかけては関東甲信地方を中心に猛暑となり、東京と甲府では最高気温の年間の極値を更新し、さらに東京では最低気温の高い気温もこれまでの記録を更新しました。

下旬は、台風第 10 号の影響で天気の崩れた地方が多くなりました。この台風は、28 日に強い勢力のまま八丈島の南東海上に達した後、本州の南海上をゆっくり西進して、31 日には高知県に上陸しました。このため、西日本を中心に大荒れの天気となりました。

【7 月の検証結果】

17 時発表予報の「降水の有無」の適中率は、全国平均で明日予報・明後日予報とも例年（注）より 3 ポイント高い、82％と 77％でした。明後日予報で例年より 13 ポイント高い四国地方をはじめ、明日予報・明後日予報の適中率とも、ほぼ全国的に例年より高くなっています。

最高気温の予報誤差（RMSE）は、全国平均で例年より 0.1℃小さい 1.8℃でした。例年より 0.4℃小さい東海地方をはじめ、多くの地方で例年より小さくなっています。

最低気温の予報誤差は、全国平均で例年並の 1.2℃でした。地域的には、ややばらつきがあり、九州南部地方では例年より 0.3℃小さかったものの、関東甲信・中国・沖縄の各地方では例年より 0.1℃大きくなっています。

（注）例年値は気象庁ＨＰ（評価）内「月毎の精度の例年値」を参照してください。

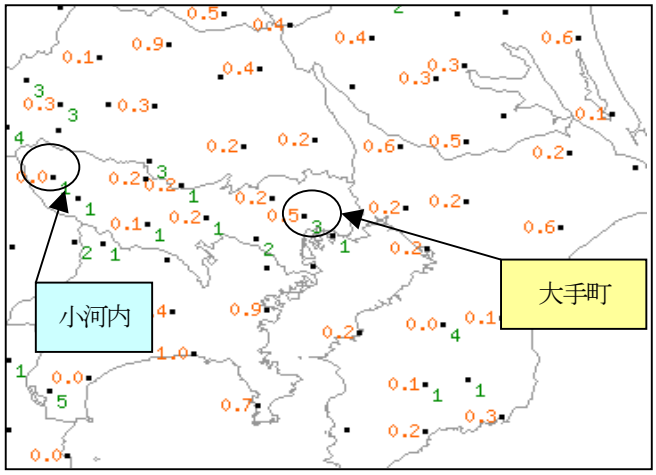
【7 月の天気予報から】――変わりやすい天気（東京地方の 7 月 30 日の予報から）――

28 日から 30 日にかけて、台風第 10 号が東日本の南海上をゆっくり西進しました。関東地方は、台風を取り巻く発達した雨雲は直接かからなかったものの、28 日の夜から 31 日にかけて、台風に伴う南からの湿った空気の影響で変わりやすい不安定な天気となりました。

29 日 17 時に発表した翌日 30 日の東京地方の予報は「曇り　所により一時雨　日中　日が射す　多摩西部では雨」でした。

図は、アメダスによる 30 日 17 時の前 1 時間の降水と日照の実況です。また、表は、東京の大手町と小河内（多摩西部）での日中を中心とした降水・日照・天気の実況です。

小河内では雨の時間帯が長く、日降水量は 50 ㍉にもなり、日照時間は 1 日の合計でも 30 分未満でした。一方、多摩西部を除く地域は、小雨が降ったかと思えば日が射したりと、小刻みに変化する天気で推移しましたが、17 時には広い範囲で雨が降りました。



7 月 30 日 17 時のアメダス　降水(緑:㍉)・日照(赤:時間)

関東地方の南部を中心に、同じ時間帯に降水と日照を観測した地点が散在するが、東京地方は 10 地点中 7 地点で 1 ㍉以上の降水があった。

7 月30日の降水量(㍉、「－」降水無)、日照(時間)、天気

	時刻	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
大手町	降水量	0	－	－	－	－	－	－	－	－	0	0.5	3.5	0
	日照	－	0.1	0.5	0.4	0.6	0.5	0.7	0.6	0.5	0.9	0.7	0.5	0.1
	天気	曇			曇			曇			晴			薄曇
小河内	降水量	1	1	1	0	7	15	0	1	4	1	4	1	0
	日照	－	－	－	－	－	－	0.1	0.2	－	－	0.1	－	－

大手町での降水量の「0」は、前 1 時間に降水はあるが、0.5 ㍉に達していない。

【9 月の天気予報の利用にあたって】

9 月になると、8 月まで日本付近を覆っていた高温で湿った太平洋高気圧は南の海上に中心を移し、寒冷で乾いた大陸の高気圧と徐々に入れ替わるようになります。この 2 つの高気圧の間で前線が形成されると、日本の天気は曇りや雨の日が多くなります。この前線を秋雨（あきさめ）前線と呼びます。

日本付近に台風が接近すると、秋雨前線の活動が活発になり、広い範囲に大雨をもたらすことがあります。

大雨によって災害の発生が予想される場合には、気象台から大雨や洪水などに関する警報を発表して警戒を呼びかけます。また、がけ崩れや、河川の氾濫の危険がある場合には、地方公共団体から避難勧告や避難指示も出されます。

9 月は台風と秋雨前線による大雨が起こりやすい季節です。各家庭では、いざという時にこれらの情報が確実に入手できるように備えるとともに、停電時でも使えるラジオを用意するなど災害への十分な備えをしてください。